■ 書　　評 ■

寺本潔著『子ども世界の地図 — 秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間 — 』（黎明書房，1988年）

谷 川　彰 英

本書は著者がこの数年間に書いた論文に手を入れ、わかりやすくまとめたものである。従来にない視点で、幅広く「子ども世界の地図」を論じたユニークな本である。

著者は大学院時代「地理学の持つフィールドワークという方法を使って、教育論文が書けないものか」と考え、「……知覚、景観、自然認識、イメージ、風景、行動、遊びなどといったキーワードを手がかりに、建築学や心理学、哲学、はては生物学や文学論の関係本が立ち並んでいる書架から、関係のありそうな本を次々と借り出しては読んでいた。」（あとがき）と書いている。

「まえがき」の冒頭には、次のようにある。

「子どもの描く絵は面白い。大人には全く違ったモチーフの見方と描き方で自由に描くから面白いのだろう。そこには、子どもの内的世界が多分に表現され、なにかほのぼのした感覚を絵から読み取れるから不思議である。『絵』とはやや異なるが、子どもの描いた地図もかなり興味深い。私は、この数年間、多くの子どもの手描き地図を集め、そしてそこから子どもの知覚空間の構造を読み取る努力を続けてきているが、手描き地図の一枚一枚ごと、それぞれにその子どもの個性があふれていて飽きないものである。」

構成は次の５章である。

Ⅰ　子どものアングル

　1子どもの視野　2風景の描き方　3手描き地図の面白味

Ⅱ　手描き地図の発達

　1地図の読み方　2ルート・マップの誕生　3サーベイ・マップへの変化

Ⅲ　子ども世界の拠点

　1秘密基地・隠れ家　2子ども道　3こわい場所　4子どもの地名

Ⅳ　遊びの規模と探検行動

　1「拠点」の経験　2遊び仲間の数　3探検行動の意義　4探検行動の発展

Ⅴ　子ども世界の構図

1発達過程のモデル　2「原風景」とのかかわり　3作家・大岡昇平の自叙伝からみた原風景　4東京・山手線を構図に描く

いずれも魅力あるトピックばかりである。著者の研究の着実さと幅広さを感じさせる。ただあえて難点を言えば、それぞれの論稿が短く、論述が不十分だということである。

冒頭から私はつまずいてしまった。

昔子どもの頃通った学校や道を何十年ぶりかに訪れると、意外にも学校や道が小さいことに驚かされる。この原因として、著者は、大人と子どもでは次の三点が異なっているからだと言う。

(1)　眼球の大きさ

(2)　距離の判断能力

(3)　目の高さ

このうち(3)は理解できるのだが、(1)と(2)とは本書の限りでは十分納得できなかった。

(1)の説明として、「同じ大きさの対象物も眼球の奥行きの乳幼児の目には、成人の目に比べて小さな像が投影される。」（P.－13）と書いているが、これはどのような裏づけによるものなのか、書き加えていただきたかった。

経験的に言えば、自分の身体が小さかったことによる、身体と対象物（学校など）の相対的大きさの関係によるものだとも思えるのだが、それはどのように位置づくのだろうか。(2)も本書の説明だけでは説明不足である。

本書はお母さん方にも読んでもらいたいという意図で書かれたものとは言うが、それなればこそ、説明はわかりやすくすべきである。

本書から特に学んだ点の一つは、「サーベイ・マップ」の説明の中で、「動線」と「座標系」という二つの概念を用いていることである。

「動線」とは「子どもの知覚空間内における一種の方向軸」であり、具体的には道路や鉄道などになる。それに対して、「座標系」というのは、道路に「ヨコ系の網目をかけたような」ものである。言わば、空間的な広がりを指す概念である。

この二つの概念は、小学校中学年の地図指導に貴重な示唆を与えてくれる。

Ⅲの「子ども世界の拠点」は、本書をきわめてユニークなものにしている。子どもの行動の仕方を追っているからである。子どもたちの生活空間を研究するのにも、示唆的である。

全体として面白い本になっているが、著者にとっての処女作ということを考えれば、もっと学術的な本として出してほしかった。それが偽わらざる感想である。

（筑波大学教育学系）